

活動報告

■「農業農村を応援する大学生サークル」代表者会議を開催しました。

一般財団法人日本グラウンドワーク協会

東京都内で「農業農村を応援する大学生サークル代表者会議」を開催しました。会議の目的は、各サークル間の活動情報交換と交流の推進で、①琉球大学おきなわ食・農研究会、②静岡大学棚田研究会、③信州大学むらづくり応援隊、④千葉大学援農お宝は発掘隊、⑤東京大学東大むら塾、⑥明治大学楽農4Hクラブ、⑦名城大学地域共創隊WITH、⑧北里大学北里農援隊、⑨神戸大学地域おこしサークル水芭蕉、⑩新潟大学研究会の10大学のサークルが参加しました。また、農村地域においては、若者の関係人口の増加が重要という観点から農林水産省農村計画課も参加しました。

昼の部の活動情報交換会では、各サークルが活動状況について発表し、意見交換が行われました。農村地域への移動経費の負担の在り方や新規部員の確保方法等各サークルの活動に当たっての課題について情報交換が行われました。

また、「お米をめぐるお話」というテーマで元農林水産大臣政務官の宮崎雅夫参議員による講演も行われました。

夜の部の交流会では、2時間飲み放題のお酒も手伝って、各サークルの代表者間のコミュニケーションが進み、アドレス交換をする等親密度が増しました。今後、各大学サークル間の交流が進むことが期待されます。

昼の部の「活動情報交換会」



宮崎議員による「お米をめぐるお話」



夜の部の「交流会」



「科学が好きである事」

北里大学獣医学部 動物資源科学科 3年 大野 熊悟

僕は科学が好きだ。でも化学の計算や構造式はどうにも慣れないし、物理は高校の時、ゴールデンウィークの課題を先生に怒られてしぶしぶ成績確定直前の1月に出すぐらいには嫌いだったし。ただ、最後の砦である生物は、生物そのものや生態系を筆頭としてどうしようもないくらい好きだ。だが、科学全般で見れば苦手ゆえの億劫さが覆ることはなく、時々顔をのぞかせては自分を苦しめてくる。

けれども地震があれば震源を確認し、目の前に知らない虫が飛び出せば手元のスマートフォンで調べる。とりあえず目の前に現れた事象や自己の内面の未知を知ろうとすることは、昔から続く科学に対する見方の一側面ではないだろうか。

そうやって日々、世界の断片に手を伸ばしてつまんでみては味見をする。

別に論文を読み漁るでもなく、計測器片手に調査に出るでもない。もっと雑で適当な散歩のような科学であるが、この原動力は案外バカにできない。科学を疑問と発見の体系と見るか、手続きの体系と見るかによっても話は違ってくるが、違和感や好奇心から始まるものではある。論文にならないような、目の前の小さな事物に対する素朴な疑問は、時に体系そのものを書き換えていく。

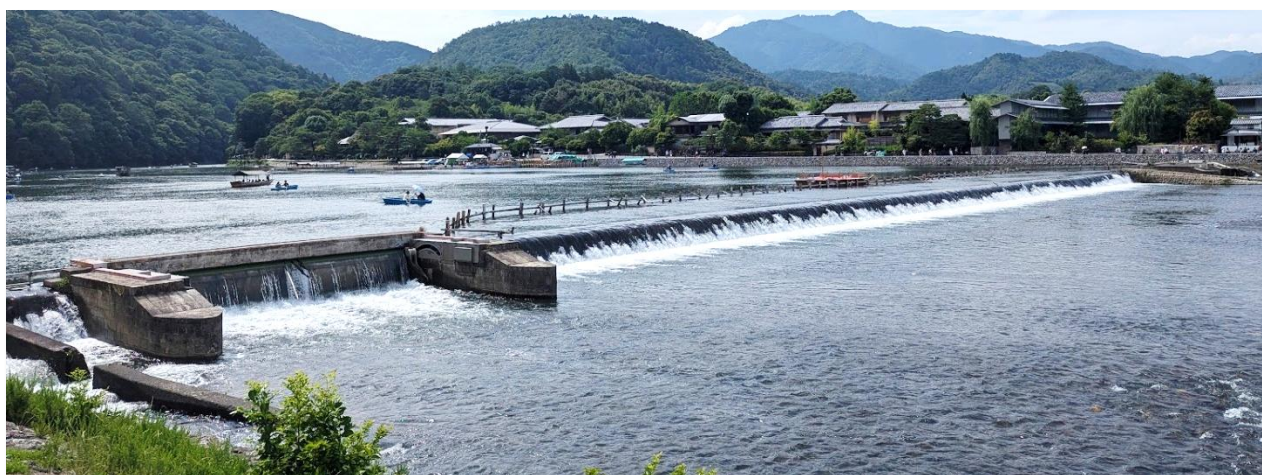
例えば虫を見つけた時、スマホでいろいろ調べて、「これ何の仲間だろうか」「翅の形と模様がこうだから多分〇〇系の仲間ではある…気がする」「もう鱗翅目sp.でいいんじゃないか？」と友人とぶつぶつやっている時間や、どこにいるのかもわからない、ただ鳴き声だけが聞こえる鳥を小一時間あてもなく探し続けるかくれんぼを黙々と楽しむ。知識なんてかけらもなく、ただただ未知を求めて歩き続ける時間こそが、案外科学に最も近い場所なのではないかと感じる。

理屈が嫌いなわけではなく、実際それに沿って物事は回っていることは理解している。ただ、押しつけがましい理屈や、既に完成された体系にびたりと収まるような理屈には違和感を覚える。自然はもう少し曖昧かつ不定形で、時に冗長でもある。それを人間の作った定義の枠にきっちり詰め込むことに、少し罪悪感がある。だから科学が好きと言いながら、「理系」に分類されるのはなんだか落ち着かない。定理や公式ではなく、足元の苔や河川敷の地層を眺めている時間のほうに自分の科学への原動力がある。それは体系の構築よりも、断片との接触、出会いの連続としての科学。この世には「わからないこと」がある。しかもそれがそこらじゅうに数えきれないほど転がっている。

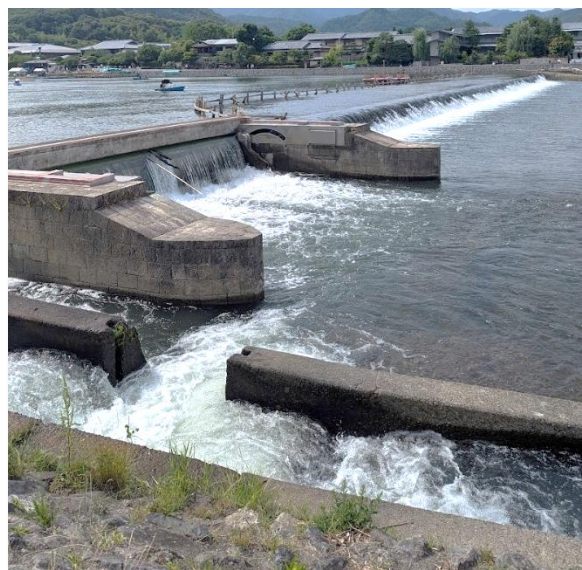
科学とは、そのようなわからないことに対しての失礼にならない応答の仕方の一つだと思う。踏みつけない、見逃さない、無視しない。そのひたすら探っていくような緊張感が心地良い。目の前にばらまかれたリアルを一つ一つ拾い、仕舞い込んでいく。だから今日もまた、知らない生き物を見つけたら名前を調べ、いつもと違う鳥の鳴き声を聞いたら少し耳を澄ましてみる。僕はそんな小さな気付きと、それを楽しむ心こそ科学であると思う。

行こうよ！水土里の旅！

一の井堰（いちのいぜき）京都市西京区



嵐山のシンボル・渡月橋。そのすぐ上流に、あまり知られていない「一の井堰（いちのいぜき）」という施設があります。観光客の多くは目の前の橋や山々の景色に目を奪われますが、じつはこの井堰こそが、桂川の流れと嵐山の風景を陰ながら支えている存在なのです。



一の井堰は、昭和27年（1952年）にコンクリート製の堰として築かれ、現在も嵐山公園や旅館、庭園などに水を送り続けています。また、この堰は景観にも大きな役割を果たしています。堰があることで水面が穏やかに広がり、橋や山並みが水鏡に映る、あの嵐山らしい風景が生まれるのです。

春は桜、秋は紅葉が川面に映える絶景は、一の井堰があってこそ。観光の合間に、少しだけ川上を眺めてみてください。渡月橋のすぐ向こうにある石造りの構造物—それが「一の井堰」です。水と人との共生、そして美しい風景の裏側を垣間見る、そんなちょっとした知的散歩になるかもしれません。

渡月橋



言わずと知れた？京都を代表する観光地、嵐山のシンボルです。本当に一の井堰の「すぐ後ろ」にあります。四季折々に素晴らしい風景です。

嵐山モンキーパーク



嵐山にモンキーパーク、、、意外な組み合わせなのは間違いないですが、眺望もよくお猿さんも可愛くておすすめです。

農業土木技術ープロの仕事

農業土木に関連する企業・団体が日々の業務で取り組んでいる技術情報を紹介する「農業土木技術ープロの仕事」。今回は、水中ドローンを使用した取水塔の劣化状況の調査についてご紹介いたします。

調査対象施設のダムは通年貯留を行うダムであるため、取水塔低位部は常時水中にあり、目視確認ができません。

このため、水中ドローンを使用して、不可視部分の取水塔低位部を確認し、施設管理者に対しても現地で技術的支援を行いました。なお、本調査は、国営造成水利施設ストックマネジメント推進事業内の管理水準向上事業により実施しました。



水中ドローン



調査に使用した水中ドローンは水中撮影、簡易点検を主な用途とした機種で、4Kカメラを搭載して全方位に移動が可能なものです。潜水深度は最大100m、航続は最大4時間（作業環境等によって異なる）で、本体とコントローラーは有線（ケーブル200m）で接続されています。

操作の様子



水中ドローンの操作は、操作性、安全性を考慮して取水塔の管理橋上で行います。水中ドローンで不可視部分を目視確認した結果、コンクリート構造物の取水塔基礎では、摩耗による粗骨材露出が全体的に見られました。一方、鋼構造物のスクリーン等では、水接触による腐食（発錆）が全体的に見られた他、漂流物の衝突と推測される塗膜の損傷も確認されました。

腐食の状態



塗膜損傷の状態



粗骨材露出の状態



農業水利施設の維持・保全是日本全体でも大きな課題となっています。効率的に実施するためにも、新しい技術が日々開発されています。私たちコンサルタントは積極的に新技術の活用をリードしていく必要がありますね。

「農業農村を応援する大学生サークル」の活動紹介

■「名城大学 地域共創隊WITH」の活動紹介

地域共創隊WITHは、ボランティアや勉強会などから「地域課題」や「地域活性化」に関する学びや発見を活かして「私たちにできることは何か」を考え実践するサークルです。具体的な活動内容は、週一の定例会の実施の他、学外でのボランティア活動や地域おこしの協力、自治体・NPO等との連携事業などです。

■となりの田んぼプログラム

市民活動団体「ONE RIVER」の取り組みの一つ、岡崎市下山学区にある現在使われていない田んぼで、地域の方に協力をしてもらいながら1年を通して田植えや稲刈りなどを手作業で体験できる取り組み。WITHは昨年度から参加者の方と一緒に田植えを行い、お米作りの大変さを実感しました。



■はじまるマルシェ

名古屋市北区にある大曽根商店街に住むお母さん達が企画するマルシェ。循環をテーマにし、ハンドメイドやフリーマーケット、子供たちによる「こども縁日」があります。WITHは野菜の捨ててしまう部分を使った味噌汁を作り、「ふるまい食」として来場者に無料で提供しました。



■「NPO法人奥三河まるごとキャンパス」との連携企画

愛知県新城市で活動する事業者の方々と、新城の魅力を伝える方法について考えました。自由闊達な話し合いから奇想天外なアイデアが生まれるなど、有意義な意見交換をすることができました。



農業農村を応援する大学生サークル」の活動状況(Instagram)

□日本グラウンドワーク協会公式Instagramにアップしています。

<https://www.instagram.com/groundworkassociationjp/>

[発行・お問合せ先等] 一般財団法人日本グラウンドワーク協会 中里

Tel:03-6459-0324

Mail:nakazato@groundwork.or.jp

グラウンドワークとは「協働で地域をよりよくする」という意味です。当協会は、「中間支援団体」として①地域活性化、②環境保全、③福祉、④棚田保全等社会的課題解決を目的に、若者(大学生等)参加及び男女共同参画による協働を主軸にした、いわゆる「日本型グラウンドワーク」を推進しています。